

年間第 13 主日 ルカによる福音 2013.6.30

9:51 イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。

9:52 そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。

9:53 しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。

9:54 弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。

9:55 イエスは振り向いて二人を戒められた。

9:56 そして、一行は別の村に行った。

9:57 一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。

9:58 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」

9:59 そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。

9:60 イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」

9:61 また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」

9:62 イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

きょうの福音は、大きくわけで二つの事柄が記されています。

1. サマリア人とイエスたち一行になにかもめごとがあった。
2. 弟子に対してイエスが覚悟や心構えなど注文をつけた。

<サマリア人、イエスを拒む>

51 節、この平行箇所はマタイ・マルコにもありますが、「エルサレムに向かう決意」とはルカ福音書にだけ記されています。まるで出陣式のようなのです。

つづく 52-56 節のサマリア人とのやりとりのくだり

一行はサマリア城下にさしかかる。まずは風車の弥七が町にさぐりをいれる。するとようすがおかしい、受け入れようとしない、それを聞いた助さん、格さんは「焼き払って懲らしめましょうか」という。そこで黄門さまが一言「助さん、格さん、懲らしめてやりなさい」とチャンチャンバラバラがはじまり、一騒動がおさまったころ「助さん、格さん、もう良いでしょう」と止めに入り、それを受けて「静まれ、静まれい、この紋所が目に入らぬか」「こちらにおわす御方をどなたと心得る! 畏れ多くもさきの副将軍・水戸光圀公にあらせられるぞ! 一同、御老公の御前である、頭が高い! 控え居ろう」と一喝しておしまい、ですが聖書では違います。

チャンバラや成敗はなく、イエスは静かにヤコブ・ヨハネをいさめ

て56節「そして、一行は別の村に行った」

となるだけです。

ここもルカだけに記されている記事でわたしにとってはなぞの箇所、解釈に苦しみます。まあ、相手が気にいらないとぶんなげて、ペチャンコにしてやれ、なんてはわたしたちも思ったり、また逆に思われたりするのですが、暴力はいけません、権威主義に走ってはいけません。

このようなあたりまえのことをいっているのでしょうか。

イエスの目的は軍事的なものではなく、また権威主義でもなかった、このような常識的なことを聖書は語るのか。

神の計画によるエルサレムへの道行きだから、51節のように宣言したり52節のようにおおげさに使いの者でさぐりをいれたりする、また、焼くとか滅ぼすとかはエリヤの故事にならっているのだという解釈もあるのですが、このように解釈してもイエスの福音にどう関係するのかがいまいちピンときません。敗戦後、戦争にはかかわらず平和な国に生きている日本人の感覚としてはイエスの目的である、非暴力、非権威がある意味で達成できているということでしょうか。

<三人の弟子候補>

51節からはルカ福音書の第二部が始まります。一部は誕生からガリラヤ宣教まで、二部がエルサレムへの道行き、三部が受難、これはマルコの福音書の構成と同じです。またここからは先週説明

した「大挿入」の始まりでもあります。マルコ福音にないイエス伝承をエルサレムへの道行きの中にルカが編集したという特徴があります。またべつのだ名もあって「ルカの旅行記」ともいうこともあります。

この「三人の弟子候補」も別の村へ向かう途中に起きた出来事ではなく、ルカが福音書の編集上サマリアの話とは無関係に、ここにはさんだと考えていいでしょう。

<一人目>

自分で弟子に志願します。イエスはきつねだの鳥だの云々といって志願者を追い返します。このイエスの言葉ですが、当時そのようなことわざ格言があったのだろうと推測されています。

キツネはヘロデを鳥は悪魔をの比喩だという解釈もあります。

キツネの部

13:31 ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」

13:32 イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。

鳥の部

8:5 「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。

8:12 道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちで

ある。

わたしにはこじつけにしかおもえませんが、面白いので紹介しておきます。

<二人目>

イエスが目をつけ従えといいます。

おのおの、親父の葬式とか、家族へ別れとかいうと、それじゃだめだとイエスは見切りをつけます。

一応、だめな理由をイエスはいうのですが誰もが理解できることではなく、普通にきいたらイエスはおかしなことをいっているな、と感ずることをいっています。

葬式のほうは解釈がたいへんです。聖書から読み取れば葬式などどうでもいいとイエスがいうこようにとれるからです。

葬式に熱心な宗教はたいてい墮落しているから、その観点で考えればイエスが葬式を重んじなかったということは理解できます。

しかしキリスト教としてはそれではたちゆかないので護教の立場、キリスト教を弁護する立場からはいろいろな論議があり、解釈、説教もたくさんあります。いずれも聖書ではこういっているけれどその真意はこうなんだとって葬式を肯定する議論です。シロをクロとする議論ですので、うまくできているのもへたなのもあります。このような議論は、聖書に関係して、それとは別に仕事上や人間関係の上で、どこかで聞いたりすることもあるでしょう。

<三人目>

家族に別れをとっているのにだめだといっている。これはさず

がに弁明もできないようで、なるほどねという解釈をわたしはまだ知りません。たいてい、これから十字架が控えているから家族もへったくれもないんだ、十字架が最優先なのだ、みたいな強弁で原理主義的におしきっています。これじゃ、昔も今も信者は躓くでしょう。

それにしてもなんでルカはこんな理解に苦しむようなことをわざわざ書いたのか？

たしかに、イエスの弟子たちは仕事も家族もぶんなげてイエスに従っているわけです。そういう意味でこの弟子選考基準は厳しいけれどそのとおりです。その確認のために第二部の冒頭ではでにぶちあげとく必要があったのでしょうか。

葬式・家族との別れ、これは仏教で言えば煩悩です。煩悩にまどわされるからダメなのだと仏教ではいいます。

ではキリスト教ではこれは罪なのか。罪人だからダメなのよ、でしょうか。

「じゃ、先に言っているから葬式が終わったら追いかけておいで」ってイエスが言えば誰でも理解できる話になります。でもそういう話ではない。

弟子になる、イエスの弟子にならない、これは福音を読み進めていくうちに、やがて深く考えなければならない問題になります。

<まとめ>

時計にはデジタルとアナログがあります。デジタルは数字で時間が表示され、アナログでは針で時間を指し示します。弟子になれ

とイエスに声をかけられた人は「はい従います」とは答えずに葬式とか家族とかうだうだ言うのでイエスに説教されました。ふつうはうだうだするでしょう。

決断とはデジタル方式で「はい、いいえ」で答えるもの、しかし、頭の中は「白と黒、ハイとイエエ」でできあがっている人ばかりではありません。

「はいといいえ」の真ん中よりちょっと「はい」よりですって答えたくなることってないでしょうか。

わたしたちにはその頭があるからきょうの福音を読んでそうだそのとおりってすっと納得できないところが残ります。

ただ、聖書にはきょうのように「シロクロ」の話ばかりではなく、慰めになる話もたくさんあります。

耳に心地よい言葉だけが聖書ではないんだよ、耳に痛いこと、聞きたくないことも聖書には書いてあるよ、というところで今日のおしまいとします。